

## 使徒の働き 15:1-35

### 恵みによって救われ、恵みによって生きる

今日、オンラインで参加して下さっている皆さん、そして対面でいらっしゃる皆さん、こんにちは。もし皆さんが、私たちの聖書の「使徒の働き」の旅を共に歩んで来られたのであれば、パウロとバルナバが第一次伝道旅行を終えたことを覚えておられるでしょう。彼らは、派遣元教会であるアンティオキア（当時はシリアにありました）へ戻って来ています。ある人々がイエス・キリストによる救いの福音について偽りの教えを広め始めたことで、キリスト教会全体に問題が発生します。パウロとバルナバはキリスト教信仰が最初に育まれ、使徒の働きにおいては依然としてキリスト教世界の中心地であるエルサレムへと送られます。そこで彼らは、この厄介な問題の解決策を模索する手助けをします。

これはキリスト教信仰の歴史において重要な場面です。なぜなら、広められていた偽りの教えが、イエスのメッセージの根幹に関わるものだったからです。もしある人々がそれを受け入れてしまえば、キリスト教信仰は一つではなくなると、本当のものと偽りのものが存在することになります。そこから生じる混乱と一致の欠如は、キリストの教会全体そのものを深刻に制限してしまうかも知れませんが、そこからは生じる混乱と一致の欠如は、キリストの教会全体の歩みを深刻に制限してしまうかも知れません。また、この問題には大きな文化的課題も含まれていました。それはエルサレムを拠点とするユダヤ人キリスト教会と、アンティオキアを拠点とする異邦人キリスト教会とが存在すると言う実質的なリスクを孕んでいました。彼らは互いに競い合い、互いの働きをさえ打ち消すことにすらなり得ました。新約聖書は旧約聖書と対立しているかのような印象を与えることになってしまうかも知れません。それは、イエスがこの世界にもたらすために来られた神の王国、平和の王国の姿ではありません。言い換えれば、主の御業は始まった当初に敗北してしまう可能性さえあったのです。

今日の物語は、人がどのように救われるのかについてです。ですから、キリスト教信仰に関する重要な基本的教えが含まれています。私たちは、良い行いによってではなく、信仰によって神との正しい関係の中に生きることが出来ます。しかし、この教会でこのメッセージを聞いているほとんどの皆さんは、すでにそのことを知っている—あるいは知っているべきです。そして、今日の聖書箇所を、信仰生活への入口について語っているだけのものだと考えてしまうかも知れません。「私はもうクリスチャンなのだから、これは私の生活とどう関係があるのだろうか？キリストについて人に話すときに、何を言うべきかについてなのだろうか？」と思うかも知れません。

まあ、そういう面もありますが、それだけではありません。私が皆さんと共に明確に受け取って欲しいと願うメッセージは、私たちは行いではなく恵みによって救われたのと同じように、日々をも恵みによって生きることを学ぶ必要があるということです。私たちがすべきことと、してはならないことを見比べて、私たち自身と他人を業績チェックリストで測る方が簡単に見えるかも知れません。しかし、真のクリスチャン生活とは、信仰を通し、恵みによって生きるものです。どうすれば、それをますます実践できるようになるのでしょうか？今朝は、そのことを深く理解して、それへの献身を今日の目標にしましょう。

1節では、救われるためには「割礼を受けなければならない」主張されています。5節では、割礼を受け、かつ「モーセの律法を守る」ことだとされています。つまり、彼らは単に一つ二つの厳格なルールについて語っているわけではありません。もし律法の一部を守らなければならないのならば、その全てを守らなければなりません。ヤコブの手紙2章10節が言う通り、「律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。」

そして、真実は、私たちの誰もがイエス・キリストを除いて、律法全体の教えを忠実に守ったことがないということです。ですから、私たちは皆、律法の違反者です。つまり、もし私たちが自分自身や他人に律法を守る責任を負わせるなら、私たち全員が違反者として責められるのは公正だということです。なぜなら、律法は神から出たものであり、良いものだからです。しかし、私たちがその責任を負わせた人々も、私たち自身がそうでなかったように、律法を完全には守れないということを知っておかねばなりません。そして主は、御自身の命令を薄め、人々がその一部だけを守ればよいと期待するという選択肢を私たちに与えてはおられません。また、他人を基準にして、周りの人々と同じくらい良いならば十分だ」と言うことも許しておられません。そうすれば、私たちはこの世で神との正しい関係に立ち、死んだ時に天国に行けるのでしょうか？いいえ。それは、神が純粹で正しく、公義を保たれる方であるという意味そのものを損なうことになります。もし私たちが神の律法を守る責任を負っているなら、そのすべてを守る責任を負っています。そして私たちは、単にそうしていないのです。私たちは、すべきでない選択をし続けています。罪を犯します。これが私たちが直面している問題ですから、これに対する正しい解決策を見つけることが極めて重要なのです。もし偽りの解決策を受け入れるなら、すべてが失われます。

では、偽りの福音を教えているのは誰でしょうか？5節には「パリサイ派の者で信者になった人々」とあります。彼らはもはやユダヤの宗教内部に属しているわけではありません。彼らは、今日私たちが「クリスチャン」と呼ぶ人々です。しかし、彼らは依然として旧約聖書の律法に従うことを非常に重視しています。新しいキリスト教会の指導者たちは、この点を重視するのは行き過ぎであると判断するに至ります。彼らは律法に従うことをあまりにも重視したために、恵みによって生きることが不可能にしていました。そしてその恵みは、キリストのメッセージと十字架での救いの御業の中心にあります。

皆さんもすでにご存じだと思いますが、「恵み(Grace)」と「憐れみ(Mercy)」は似ていて、どちらも「愛」という大きなカテゴリーの中にあります。恵みとは「値しない好意」です。言い換えれば、恵みを受けるとは、たとえそれに値しなくても、良い物を得ることと言えます。憐れみを受けるとは、たとえ受けるに値しても、悪いものを受けないということです。最大の恵みは、いのちという賜物です。最大のあわれみは、罰としての死を受けないことです。

数年前、私は少し変わった経験をしました。恵みとあわれみの本当に良い例とは言えないかもしれませんが、役に立つことを願ってお話しします。私はアメリカのワシントン D.C.にあるロナルド・レーガン・ワシントン・ナショナル空港で、テネシー州ナッシュビルの姪の家での家族の集まりに向かう飛行機を待っていました。そこに行ったことがあるなら、一部のゲートが中央の通信デスクの周りに円形に配置されていることを覚えているかもしれません。それは私にとって、中央デスクのスタッフと自分の搭乗口の係員の両方からのアナウンスを同時に聞くことを意味し、自分が搭乗列に並ぶ番かどうかを聴き取る

としていました。そのうえ、多くの人々の話し声もあり、はっきりと聞き取るのはとても難しかったです。

特別な配慮が必要な人々が搭乗した後、私は自分の搭乗口の案内のように聞こえる呼び出しを耳にしましたが、確信はありませんでした。私は入口にいた係員に近づき、「私は 29 列です。入っていいですか」といったようなことを尋ねました。彼女は私を通しました。しかし、機内に入ると、客室乗務員が私に微笑みかけ、「<sup>ii</sup>感謝申し上げます。」と言いました。それは奇妙に思えました。それは軍役のある人に対して言う言葉です。「<sup>iii</sup>私が米軍の一員に見えるだろうか？」と思いました。そして、何が起こったのか理解しました。特別な支援が必要な方々が他の乗客より先に搭乗している時に、私が搭乗してしまったのです。恥ずかしさと混乱、そして罪悪感が同時に押し寄せてきました。

その状況で、私は何も努力して得たわけではないのに、「早く便利に搭乗できる」という良いものを受け取っていました。これが「恵み」だと言えるでしょう。スタッフは私にこう言うこともできたはずですが。「ちょっと君！軍人じゃないだろう？出て行きなさい！列の最後尾に並び直すんだ！」しかし、誰もそんなことはしませんでした。それが「憐れみ」だと言えるかもしれません。

クリスチャンとして、神は私たちを憐れみ、恵をもって受け入れてくださいました。だから私たちはその愛によって自由にされています。それは、私たちにとって、キリストに従う者であるとはどういうことかの核心です。ですから、たとえ悪意がなくても、これと衝突する教えを広める偽教師たちが現れるなら、それに反対しなければなりません。

10 節は、彼らが「信者たちの肩に重荷を載せた (<sup>iv</sup>NIrV と原文に基づく意識)」と言っています。他の多くの翻訳ではこの「重荷(load)」を「くびき(yoke)」と訳しています。それは、農夫が牛のような使役動物の肩に置いて、その場に留まらせ、例えば耕作のために重い荷を引かせるためのものです。また、残酷な主人が人間の奴隷に付けることもありました。律法は基本的には、人々を自由にし、私たちが良く生きるために必要な導きを与えることを意図されています。それは文法の規則によく似ています。それは文法の規則に似ていて、私たちがそれを理解し、正しく使うのであれば、自由かつ明確に意思疎通する助けとなります。しかし、律法が誤解されたり誤用されたりすると、私たちが自由な人間として生きることを妨げることがあります。それは、律法を与えられた神御自身の、貧弱な代用品に過ぎません。

別の視覚的なイメージを使うなら、律法は「鏡」によく似ています。それは私たちの良い点と悪い点、正しい点と間違っている点を映し出します。しかし、食べ過ぎて太ってしまった私が、鏡によって体重を減らせないと同じように、律法そのものには私たちを変える力はありません。鏡にそれを期待するのは愚かなことです。ですから、もし私たちの代わりに律法を完璧に守られたキリストを信頼することによってではなく、神の律法を守ることによって救われると言うなら、私たちは律法を神より上に置いているのであり、本当に間違った道へ進んでいるのです。

事実は、私たちの誰もが律法を完全に守ったことがないので、もし私たちが正直に私たちの欠点を見るならば、容易にフラストレーションに苛まれ律法が教える良いことを行うのを諦めてしまいかねません。もし私たちがあまり正直でないなら、自分は律法をかなりよく守っている—少なくとも「あの悪い人たち」よりは—とまじだ—と自分を欺いてしまうかもしれません。高慢になり、根拠のない誇りに満ち、ひどく自己認識に欠けた者になって終わるかも知れません。それは私たちの神が望んでおられる救いではありません。このようなことが起こる時、律法はただ私たちが正しく罪に定める役割を果たすだけです。問題は律法ではありません。律法は神の真実な御言葉です。問題は、それを私たちが誤解し、誤用することです。神よ、私たちがそのようなことをしてしまう時はいつでも、お救しください。そして、あなたの良い律法を用いて、私たちがあなたを知り、愛し、さらにあなたに似た者となる自由を与えてください。

キリストの福音の真理は、私たちの唯一の希望は、神の恵みと憐れみによって受け入れられることにある、ということです。私たちが神の御前で受け入れられる者となるためには、神が私たちの罪をきよめてくださらなければなりません。ペテロが 11 節で「私たちが主イエスの恵みによって救われたこと...、あの人たちもそうなのです。」と言っている通りです。エペソ人への手紙 2:8 はこのように言っています。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行いによるものではありません。だれも誇るものがないためです。」

皆さんは、贈り物のために支払ったことがありますか。もちろんないでしょう。もしあなたがそれに支払ったのでしたら、それは贈り物ではありません。同じように、聖書の神は、私たちは (a) 行いによって救われるのではなく、(b) 信仰と行いによって救われるのでもなく、(c) 働きを生み出す信仰によって救われる、と教えておられます。私たちが罪の代価を支払うためにキリストの十字架の死という賜物を誠実に受け取るのであれば、それに何かを加える必要はありません。キリストは完全ないけにえでした。そして、いずれにせよ私たちはキリストから離れて、主の御業に何かを加えられるほど十分に良い者ではありません。ですから私たちは、*宗教改革*によって有名になった<sup>4</sup>教えを受け入れます：救いは信仰のみ、キリストのみ、恵みのみ、聖書のみ、神の栄光のみ（ラテン語：*sola fide, solus Christus, sola gratia, sola Scriptura, soli Deo gloria.*）

もちろん、これはキリストに従う者として、私たちが何かを学ぶ努力をし、信仰を強くし、何らかの方法で成長しなくてよいということを意味ではありません。私たちは、信仰によってキリストと結ばれた結果として、多くの良い行いをするでしょう。しかし、それらは主の力によって、主の導きの下で行うのであり、その行いのどれ一つとして、私たちがそれを行う前よりもさらに神に受け入れられる子どもにしてくれるわけではありません。教会員であることは私たちが救いません。教会活動での完璧な出席記録は私たちが救いません。非常に多額の献金をする、多くの時間を奉仕に費やすこと、長年にわたり神の御言葉を学ぶこと、牧師の招きに応じて教会の前へ歩み出て、ある祈りの言葉を口にすること—これらのどれも、それ自体に人を救う力はありません。それらはすべて非常に良いことで、神は特定の時にあなたをそれらへ導かれるかもしれません。しかし、それらを信仰そのものと混同したり、救いの条件として付け加えたりしてはなりません。神に導いていただくことを信頼することだけが、あなたを天の御国へ導くのです。

そして、繰り返しますが、この恵みの中心性についての教えは、私たちの信仰生活への入り口に関するものだけではありません。それはまた、私たちが正しい道を歩み続けられるよう、恵みによって、神の憐れみによって、神に頼りながら、日々どのように生きなければならないかを教えてくれます。

11 節に戻ると、私たちが使っている NI<sup>r</sup>V<sup>vii</sup>の語順に興味深い点があります。その訳は少し判りづらくしてしまうかも知れません。他の翻訳ではより明確です。例えば New Revised Standard Version (NRSV)は‘...We believe that we will be saved through the grace of the Lord Jesus, just as they [the non-Jewish believers] will.’となっています。New International Version (NIV)は‘We believe it is through the grace of our Lord Jesus that we are saved, just as they are.’となっています。

私たちはペテロが「...彼らも私たちと同じように救われます」と言うのを期待するかもしれませんが、彼はそれを逆に「私たち、は彼らが救われたように救われます」と言います。彼は「我々は、この新しく加わった人々から学ぶべきことがあります。彼らは真の救いとは、どれだけシンプルなのかを示しています。それは恵みによって信仰を通して来るものです。それだけであり、それが全てです。何も加える必要は無いし、してはいけない。」と示唆しているように思えます。

これらのペテロの大胆な言葉の後、宣教師たちが話します。12 節は「すると、全会衆は沈黙してしまっただけです。そして、バルナバとパウロが...話すのに、耳を傾けた。」と言っています。何と「沈黙」していたのです！これは驚くべきことです。もし、皆さんが神とその御言葉について深い信念を持つ人々の周りにいたことがあるなら、彼らがどれほど情熱的に議論するかをご存じでしょう。ここには文化的なことが起こっているかも知れません。イスラエルで学んだことのある私の同僚は、非常に表現豊かな人々が自分の主張に興奮し、「つばを飛ばしながら」激しく議論しているのをよく聞いたと言っていました。そのように異なる深い確信を持つ多くの人々が同時に静かになったという事実は、ここでのバルナバとパウロのメッセージがどれほど重大だったかを示しています。

そして 15 節の前半では、ヤコブが話しています。(これはイエスの兄弟であるヤコブです。福音書に出てくる 12 弟子のヤコブ [ペテロ、ヤコブ、ヨハネ]ではありません。あのヤコブは使徒の働き 12:2 でヘロデ王の命令によって殺されたことを思い出してください。) ヤコブはペテロの言葉を肯定します。神が非ユダヤ人を愛し、旧約の時代でさえ彼らの一部を自分のものとして選んだことを。彼は、「預言者たちのことばもこれと一致しており」と言います。彼は預言の旧約の書、アモス書 9:11-12 を例として挙げています。(使徒の働き 15:16-18)。別の明確な例はエレミヤ書 31:31-34 です。

見よ。その日が来る。――主の御告げ――その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握って、エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破ってしまった。――主の御告げ――彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。――主の御告げ――わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。そのようにして、人々はもはや、『主を知れ』と言って、おのおの互いに教えない。それは、彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。――主の御

告げ—わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。』

神は旧約の契約を御自分の民イスラエルと結ばれました。しかしイエスが来られた時、神は御自分の民と新しい契約を結ばれると宣言されました。それは、民が守らなかった古い契約の成就でした。新しい契約は、信じるすべての人、そして信仰によってその契約に入ることを真実に約束する世界中の人々との契約です。契約は血を流すことによって結ばれました。旧約の契約は動物の犠牲によって、新約の契約はイエスの十字架の死によってです。死の少し前、主は弟子たちに、私たちが主の晩餐式で思い起こす言葉を語られました。マタイの福音書 26:27-28 が言う「また杯を取り、感謝をささげて後、こう言って彼らにお与えになった。「みな、この杯から飲みなさい。これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです。」だからこそ、私たちは古い賛美歌でこう歌うのです。viii「イエスがすべてを贖ってくださった、私はすべてを主に負っている。罪は深紅の染みを残したが、主はそれを雪のように白く洗い清めてくださった。(意識)」

これら全てを考慮した上で、エルサレム会議は結論に達します。19-20 節で、ヤコブはこう言います。「そこで、私の判断では、神に立ち返る異邦人を悩ませてはいけません。ただ、偶像に供えて汚れた物と不品行と絞め殺した物と血とを避けるように書き送るべきだと思います。」

繰り返しますが、これはヤコブの言葉です。カトリック教会は長年、イエスが天へ帰られた後、ペテロがキリスト教会の最初の指導者であったと教えてきました。言い換えれば、彼らの理解では、ペテロが最初の教皇だったということです。しかし、この節を読むと、ペテロがすべてを指揮していたという単純な構図には見えません。ヤコブもまた、かなりの権威を持っていたようで、おそらくペテロと並んでいたと思われる。

では、会議が新しい異邦人クリスチャンたちへ手紙で送った、この短い指示の一覧(29 節でも繰り返されています)に戻りましょう。これは誤解されやすい部分かもしれません。教会指導者たちが、彼らは旧約の律法全体を守る必要はないと告げた直後に、新しい信者たちが守らなければならない新たな命令の一覧を与えているように聞こえるかもしれません。これは、キリストにある自由を語りながら、より軽い重荷ではあっても、なお重荷を負わせているだけなのでしょうか？

いえ、それは全くこの本質ではありません。これらは、救われるためにしなければならない事についての命令ではありません。これらは、新しい異邦人クリスチャンに対して、現実的な理由から出された要請、あるいは指導です。特に、異邦人クリスチャンたちが、ユダヤ的背景を持つキリストにある兄弟姉妹たちと良い関係を保つ助けとなる事柄です。

イエスがそうだったように、最初のキリスト者たちのすべてまたはほとんどがユダヤ人だったことをい出してください。ですから彼らは、絞め殺した動物の肉を食べることを避けるのが極めて重要である文化の中で一生を過ごしてきたのです。それは神の明確な命令でした—明らかにすべての状況ですべての人のためのすべての時間ではありませんが、神が選ばれた民、イスラエル国民のためのものです。神の目的の一部は、彼らに信仰によって生きることを教えることでした。神がそう言われたという事実だけで十分な理由だったのです。また、多くの食物規定の別の目的は明らかに健康を保護するものでした、もちろん冷蔵庫がなかった時代で、病気を避けるのが非常に難しかったときです。同

様に、ギリシア・ローマ文化で普通と考えられていた性的行動の多くは、ユダヤ人の旧約聖書の教えからすれば衝撃的な不道徳でした。

さて、新約時代になり、異邦人がユダヤ人と共にキリスト教会へ入って来るようになると、この全く異なる背景を持つ人々は、神の信仰の家族として共に歩み、共に仕えることを学ばなければなりませんでした。21節で「昔から、町ごとにモーセの律法を宣べる者がいて、それが安息日ごとに諸会堂で読まれているからです。」と述べています。新しいキリスト教世界でも同じような状況でした。イスラエル国内でも国外でも、多くの教会にユダヤ人信者がいました。エルサレム会議の指示は、新しい信者たちに対する賢明な助言でした。どのようにすれば新しい教会のユダヤ人メンバーを不用意に怒らせずに済むかを教えているのです。それは、「もしあなたがこれらの特定の食べ物を食べることを避け、結婚生活（つまり、一人の男性と一人の女性の間の生涯にわたる愛と献身的な関係）内でセックスを保つことを選択するならば、あなたは教会の家族のユダヤ人メンバーとはるかにうまくやっていくでしょう。」というような内容です。

救いの条件として旧約聖書の律法に従うことを主張する人々の問題は、エルサレムの教会指導者から送られた手紙によっても解決しませんでした。これについて詳しく知りたいために、ガラテヤ人への手紙を読んでもください。明らかに、この問題に対処するために大部分が書かれたようです。

今日のメッセージを締めくくるにあたり、ペテロの手紙 第二 3:16 後半-18の指示を受け取りましょう。ペテロは、パウロが書いたもの（ガラテヤ書など）について語っています。

無知な、心の定まらない人たちは、聖書の他の箇所の場合もそうするのですが、それらの手紙を曲解し、自分自身に滅びを招いています。愛する人たち。そういうわけですから、このことをあらかじめ知っておいて、よく気をつけ、無節操な者たちの迷いに誘い込まれて自分自身の堅実さを失うことにならないようにしなさい。私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。このキリストに、栄光が、今も永遠の日に至るまでもありますように。アーメン。

祈りましょう。

主よ、今日のメッセージを通して、私たちはあなたの恵みによって生きていることを、もう一度思い起こさせてくださり感謝します。私たちの人生そのものがあなたからの賜物であり、日々を歩むために必要なすべては、あなたの御手から来ています。私たちがキリストの十字架の死による恵みによって救われたように、日々も恵みによって生きることができるよう助けてください。自分自身の力や努力ではなく、支え、導き、守り、励まし、そして必要のすべてを与えてくださるあなたの絶えざる臨在に信頼して歩ませてください。キリストの御名によってお祈りします。アーメン。

---

i ユダヤの宗教 (原文:Jewish religion) ユダヤ教は Judaism と訳されますので、敢えて分けて書いています。

ii “Thank you for your service”は、軍隊に所属していた、あるいは現在所属している人々への感謝の気持ちを表す丁寧な表現です。アメリカの日常英語では、兵士、退役軍人、そして時には警察官やその他の緊急対応要員に対してよく使われます。

iii 原文：“Do I look like a member of the U.S. military?” 米軍（に限らず軍）には軍人であっても「戦闘職」以外の職種もありますので一概に「兵士」とは言えません。また軍には軍属ではない、いわゆる制服組も在席しています。

iv NIrV: You test him when you put a heavy load on the believers’ shoulders.

v 原文：Protestant Reformation=宗教改革

vi 五つのソラは、プロテスタント宗教改革と改革神学者たちの神学を要約したラテン語の語句で、「ソラ」は「～のみ」を意味するラテン語です。今日の翻訳では「信仰」の箇所を古い「信仰義認」という言葉から、新しい表現（ローマ人への手紙 3:28 に「のみ」を加えたもの）を取り入れました。興味のある方は“Five solae”を調べてください。ルター・カルヴァンなどの言葉です。

vii NIrV: ‘We believe we are saved through the grace of our Lord Jesus. Those who aren’t Jews are saved in the same way.’”

viii 英語詞：Jesus paid it all, All to Him I owe; Sin had left a crimson stain, He washed it white as snow. 新生讃美歌 297 番 楽曲名 Jesus Paid It All.